

創業時代

は大洋漁業に通信士として乗船、赤道直下で操業中長男洋一が誕生した。誕生後、船は危険だからと、父と妻が相談して、今のこの土地を手、なるべく早く早く下船させたいと思っていたようだ。

毎月妻の元に会社から留守宅送金があった。妻は生家で農作業を手伝っていたので、生活費はあまり掛からない。

送金してきたのを、殆ど貯金していたようだ。年二回のポーナスは釜石に入港したとき渡されることがあった。妻は釜石まで会いに来た時、その月の給料と一緒に手渡されたことがある。

長い休みに、田舎に帰り休み、出航四、五日前に二人して釜石に帰り海員会館や旅館に泊まる。出航日に、給料とポーナスを纏めて支給され、一人で旅館に泊まった時、心細いのと、大金を持っているので寝られなかったと言っていた。

この家、屋敷は兄の先妻の子が養子に來た魚店だった。養父はこの店を建てて間もなく亡くなり、商売が出来ず、私に譲り小松島に下宿屋を新築、引越して行った。

店を出せる土地付きを、妻がせっせと貯めたお金で現金で払った。今買うとすれば、長い年月、いや一生かかって、私には買えないだろう。

昭和三十年、船長が下船したので、私も下船し田舎に帰った。

三十一年三月トラック一台に、買って貰った所帯道具を積み、妻は大



釜石にて（海員会館）

きいおなかで洋一を抱き、私も一緒に乗って仙台に到着、永い我が家の歴史が始まった。

一年半前に建てた平屋で、店は魚屋作り、改造しなければならぬ。田田の小松大工さんを頼んで貰い、電気店らしく直した。風呂は無いので、十分ほどの所にある銭湯に行ったが、妻はおなか大きいし、田舎育ちで恥しいと言っているので、裏庭にバラックの小屋を造作、鉄砲風呂を求め、浴室を作った。

仙台駅前の、宇野電気社長さんの尽力にて、サンヨーの看板を掲げ、店名を村上電機ラジオ店として、長い人生行路の第一歩がスタートした。知らない初めての町に、田舎出の世間知らずが、開業しても売れるはずが無い。商売も生まれて初めてだ。一日百円も売れない日が多い。出かけるのも自転車だ。もっともあの時代、問屋に小物を注文すると自転車で配達だった。長い四十ワットの蛍光管を一本注文すると、店員が蛍光管を背中に斜めに背負って配達に来る。

NHKのテレビが放送始まった年だ。テレビを持っている家庭は十軒に一軒位しかない。私は前年十四型をキットで買い、組み立て、店に展示してあった。相撲の時などは、店前は無料観戦の人々で黒山だった。店売りだけでは生活できない。国立病院はその当時木造の平屋、バラックだった。鉱石ラジオを作り、入院患者に病室の軒下にアンテナを張り売った。製品を売るより利益が出る。

八月に二男が生まれ、父より結婚した泰ちゃん夫婦を同居させてくれと頼まれ、一つ屋根に二家族の生活が始まった。

泰ちゃん達は八畳、私らは六畳、反対な部屋割りだが、店があるので仕方が無い。その後泰ちゃん達は父の頼みで、裏に二十坪を贈与することになり、十三坪の家を建て、引越し、本来の生活が始まったが、土地の事で私の一生の悔いを残した。

商才もなく、肝っ玉の小さい私が、なんとか家族と共に生きて来たのは奇跡に近い。結婚五十年、金婚を子供たちに祝って貰い、幸せだ。

あの時代を偲ぶ時、余生も元気で頑張らなくてはと思う